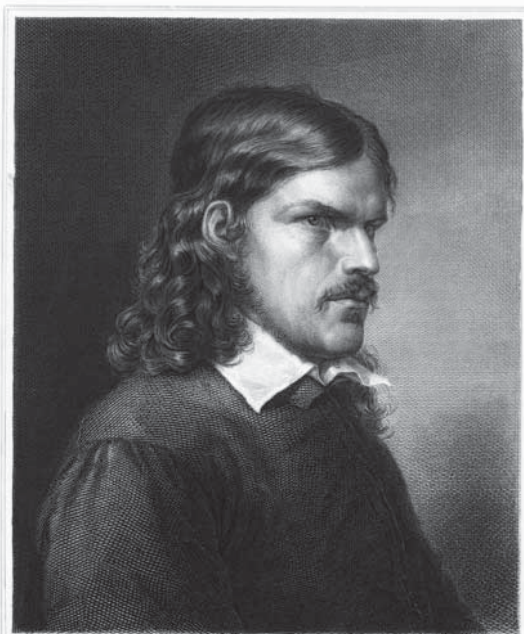


# 多才な詩人リュッケルト

渡辺美奈子

(文学博士・ドイツ文学・横浜薬科大学講師) Minako Watanabe

シューベルトの「きみはわが戀い」、シューマンの「献呈」、マラーの歌曲集『亡き子を偲ぶ歌』などの詩で知られるフリードリヒ・リュッケルトは、ベルリン大学東洋言語学教授でもあった多才な詩人である。リュッケルトの訳したコーランのスーラは現在まで長く愛読されており、翻訳、教授、著述した言語は44種類に及ぶという。だが幅広い知識と豊かな感性で膨大な作品を残しながら、生前から作品の出版数は非常に限られていた。ドイツ文学史においては、関連の書籍においてリュッケルトの名が見あたらないものがある。とはいえすでに1963年、生誕地シュヴァインフルトにリュッケルト協会が設立され、リュッケルト研究は次第に活発になり、近年ようやく批判全集なども出版された。本稿もリュッケルトの人と作品を伝えるために少しでも貢献したく、まず詩人に親しんでいただけるよう、主に結婚までに関わる逸話をいくつか取り上げてみたい。



■アムスラーによるリュッケルトの肖像

リュッケルトといえば、まずウェーブのかった長い髪を思い出される方が多いのではないだろうか。髪だけでなく服装も目立っていたようである。ナポレオン戦争が終結して間もない1815年末、リュッケルトはシュツトガルトで出版業を営むコッタの有名な小冊子「モルゲンブラット」の編集者となるが、翌1816年、その革新的な髪型と古風なドイツの服装が反体制的とみなされ、ヴュルテンベルク王国から追放されそうになった。リュッケルトより6歳若く、シューベルト作曲の『冬の旅』で知られるヴィルヘルム・ミュラーが同じ頃属していた「ベルリン・若いロマン主義者の会」のメンバーが、「古いドイツの衣装を着て颯爽と歩き、敬虔な古いドイツの芸術に夢中になっていた」(Hatfield: Wilhelm Müller, Gedichte, 1906, S.VIII)というから、リュッケルトの服装も、同様にナショナリズム的傾向に由来するのかもしれない。ヴュルテンベルク王子ヴィルヘルム、およびコッタにリュッケルトを

紹介した友人ヴァンゲンハイムの力によって追放は免れたが、リュッケルトはその代償として「ドイツ的な髪と髭を切りそろえなければならなかった」(Schimmel: Friedrich Rückert, 1987, S.19)。

1817年、リュッケルトは「モルゲンブラット」編集の仕事を手放すが、それでもコッタは、リュッケルトの出版に協力するだけではなく、イタリアへの旅費を支援した。そうこうするうちにリュッケルトの髪と髭は以前のように長くなったようである。

リュッケルトとミュラーは、ほとんど同じ時期にイタリアに滞在し、イタリア各地の民衆詩を取り入れながら、形式をそのまま使うのではなく、それぞれ独自の詩形を生み出した。マラーの歌曲で知られるリュッケルトの詩では「美しさゆえに愛すなら」がシチリア島の詩に由来する。初版では「いちやつき」という題でまとめられた一連の最初の詩で、「シチリア風」と書かれていた。詩集によって4行詩節で書かれているが、シチリア



■「カフェ・グレコの芸術家たち」(フォーア 1818)

左方中央奥にとりわけ長身のリュッケルト、隣にリュッケルトとその子どもたちの肖像で知られる銅版画家カール・バルトが認められる。中央はフォーアの愛犬グリムゼル。なおフォーアは1818年6月29日、当地で溺死する。

の詩と照らし合わせると、1行が長い2行詩節によってab/ab...という脚韻が浮き彫りになる。

リュッケルトにはアリッチャ、ミュラーにはアルバノに由来する詩形もある。1818年夏、アルバノに滞在していたミュラーは、アリッチャの高い森に滞在中のリュッケルトを訪ね、一緒に小旅行に出かけた。ふたりはハイキングをし、安価な宿に宿泊したのだが、待っていたのはノミヤシラミたちであった。ふたりは虫の害に耐えられず、外に出て湖に飛び込んだ。ところがリュッケルトは泳げなかったのである。溺れかけた立派な体格のリュッケルトを岸まで運んだのは、華奢な身体つきのミュラーだった。この話は1845年、ミュラーの息子で著名な東洋学者・宗教学者マックス・ミュラーが、ベルリン大学で当時東洋言語学教授であったリュッケルトにペルシア語を師事した際、リュッケルトから聞いたという。リュッケルトは、すでにミュラーの英雄伝を書いたと語ったそうである。

最後に、リュッケルトの生誕地シュヴァインフルトについて述べてみたい。シュヴァインフルトはバイエルン州北西部にある独立市で、第二次世界大戦中の1943年、連合国軍による「シュヴァインフルト＝レーゲンスブルク作戦」によって壊滅的な打撃を被ったことで知られる。リュッケルトは4歳になる1792年から10年間、役人である父の仕事のためにオーバーラウリンゲンに移り住んでいたが、10歳時に故郷を訪れた。市庁舎に刻まれた市名を見た印象を後に彼は、「なぜシュバインフルトなんていう、ぞっとする名前が付けられたのだろうか」と記している。

「シュヴァイン」は「豚」、「フルト」は「浅瀬」の意味で「フランクフルト(フランク族の浅瀬の意)」など川沿いの街によく付く地名であるから、「豚の浅瀬」を意味する生誕地を詩人が嘆くのもしかたあるまい。後にリュッケルトが生誕地を吟じた詩を要約すれば、次のような内容である。メイン川があるからメインフルト、葡萄酒ができるからワインフルトならまだよかろう。よりもよって豚なんて。きっと街ができた時には、ラムフルトという名前にしようとしたのだ。川で水を飲む子羊(ラム)を見ながら彫刻家はそれを石に彫ったのだが、この彫刻家の技術があまりにも拙かったので豚になってしまい、それが町の名になってしまったのだ。

豚がスマートな印象を与えないのは洋の東西を問わないようだが、ドイツで豚は幸福のシンボルでもある。お金が貯まるようにと貯金箱は豚の形が多く、新年には豚、特に子豚を食べる習慣がある。決して上品とはいえない名が、小さな市に偉大な詩人・言語学者が誕生するという幸福をもたらしたのかもしれない。現在シュヴァインフルトは、リュッケルトの作品出版や研究に多大なる貢献をしている。リュッケルト自身は、人生の伴侶に恵まれるという幸福を授かった。1820年末、リュッケルトはコーブルクで下宿先の娘ルーイーゼ＝ヴィートハウス＝フィッシャーに出会い、心を惹かれ、翌1821年、たくさんの詩で愛を語った。詩集『愛の春』(1821)に収められ、シューマンの歌曲「獻呈」で知られる「きみはわが魂 わが心」はそのひとつである。